

地域と世界をキャンパスに 社会で「あてになる」人材を育む

春日井市のワンキャンパスに学生数約一万一〇〇〇人を擁する文理融合の総合大学、中部大学。同大学は「不言実行あてになる人間」を建学の精神に、豊かな教養の涵養と自立心・公益心を持った高度な専門職業人、有識社会人を輩出し続け、昨年五〇周年を迎えた。テラーメイド教育の実践をはじめとした教育改革に取り組み山下興亜学長に話を聞いた。

——大学の歴史について。
山下 大学とは社会における一つの装置であり、近い将来要求される人材を先読みして、ニーズだけでなくシーズを提供することが大事だと思っています。

一九三八年に中部大学法人の母体ができ、六四年には後に工学部（八学科）となる中部工業大学が開学しましたが、まさにものづくりに必要とされる時代でした。そ

科）ができました。このときに日本で初めて生命医科学科を設置しました。そういった様々な人材を

育てるために〇八年に現代教育学部（二学科）ができましたが、そもそも人材育成のためには自分達が育たなければなりません。すなわち「育人材は育大学」ということで

輸入学による知識伝達型の画一化された知識ではなく、自前の知をどう生産していくべきかが大学の課題となっています。中部大学ではディシプリン型の学問体系に加え、従来の論理では解決できない課題対応型の学問を、その時々に応じてつくってきました。

——二〇一六年には、経営情報

学部の三学科が経営総合学科に、国際関係学部の三学科が国際学科に生まれ変わる予定ですね。

山下 量的拡大に続き、ひとりひとりの質を上げるためのテラーメイド教育の充実です。その点、学科の統合は画一化の逆を行うものです。必須栄養素を与えなければ、人間は大きく育ちません。学問も同じで、基礎基盤をしっかりと学び、知力・体力をつけてから各々の好きな分野に進めば良いのです。今回の改組は学科の一本化により従来別々であった三学科の組み合わせを可能にし、プールを大きくし、選択の幅を広げるためです。

人口減を海外からの人材で補お